

西田良子著

## 『宮沢賢治・その独自性と同時代性』

荒井とみや

本書の基本的なモチーフは、そのサブタイトルがみごとに示している。序の中の著者のことばを借りると、「これまでの賢治研究は、賢治の『独自性』を高く評価するあまり、『同時代性』を看過していた」という。その反省に立つて、賢治の文学がいかに時代やその社会と深くかかわっていたかを明らかにし、そこからその独自性がいかに形成されたかを示そうとする仕事である。

私は常々、宮沢賢治の全集の豪華さと、それにも勝る研究の豊富さに驚きながら、賢治が死んだ同じ昭和八年に、牢獄で虐殺された小林多喜二のことを思う。そして現在小林の小説が殆んど読まれないことを対比させてしまう。また、賢治の最初の全集は、三巻本として出たが、これはひとえに草野心平の努力によるもので、彼に動かされた横光利一が「文学界」の同人であったことから、その出版元の文圃堂に頼んで実現した。しかし売れ行きが芳しくなくて「文学界」の原稿料を「賢治の本でカンペンしてくれないか」といわれたというエピソードを高見順が書いているのを思いあわせる。文学の生命の不思議さを、その予測出来ない運命を語ってあまりある話である。宮沢賢治という現象は、同時代性として何よりも研究されるべきものだと、今さらながら考えさせられる。

一章(本書では章の表記がない)の「宮沢賢治の(四次元意

識)の形成——成瀬関次著『第四次延長の世界』の受容——」はすでに「大谷大学研究年報・第46集で接した論文で、そこに「その独自性と同時代性」という問題意識は示されていた。著者が一冊の古本を発見されたことから、研究者の中では決定的に思われていた「第四次延長」の解釈がまるでドラマの事件のように崩れていく。賢治は雑誌発表の成瀬論文を読み「第四次延長」ということばを受容する。この知的敏感さは賢治がまさしく時代の子であることを示している。

宮沢賢治の処女詩集「春と修羅」が出版された大正十三年という年は、関東大震災後の大混乱が鎮まっていな時期である。その詩集が、混乱の申し子であるグダイスト達に与えた衝撃は痛烈だった。その頭目ともいふべき辻潤がすぐさま「この詩人はまったく特異な個性の持ち主だ」と着目し、当時のベストセラー「アラトウストラはかく語りき」にも勝ると評価したことを著者は第二章の冒頭に挙げて、賢治の表現と認識を追及する。読者はここで、賢治文学の世界の驚くべき構造を知らされるのである。「法華経」で説く現実認識と「化学本論」の現実認識とが、賢治にあつては何ら矛盾しないで同じ真理に至ると。科学者の目と宗教家の目の「二つの異なる目」を持つていたという。

三章では「風の又三郎」が、先駆的作品「風野又三郎」との比較で考察される。「銀河鉄道の夜」と並んで広く愛読されているこの作品が細心の推敲を経て熟していき、賢治の童話に多い「教訓性、寓意、化学的知識や仏教的知識」を払拭し、文学どおり風のような自在な世界として完成する。そして徐々に戦争の時代に入っていく昭和十年代の日本の、「少国民」たちのつかの間の夢を育んだ「村童」小説群、すなわち坪田稜治「お化けの世界」

「風の中の子供」、千葉省三「虎ちゃんの日記」等と密接に關係しあっている。「風の又三郎」もまた時代が生んだ作品なのである。

雑誌「児童文学」(一九三二・昭六・七月創刊)をめぐっての四章の論考には、近代文学史、昭和文学史の側からも学ぶべき多くのものがある。この雑誌の編集者、佐藤一英は単にこどものためだけの童話ではない、大人も読む文学を目指した。彼は教化を目的とした童話は「児童を軽蔑することにより始つてゐる」と直感し、「児童には文学的精神がかけてゐるものだといふ觀念」が童話配給者を毒していると告発する。半世紀を経た現代の私たちをも鋭く鞭打つことばである。プロレタリア童話も国策推進の童話も、子どもの魂や感受性を軽んじる点では同罪なのである。こうした編集方針によつて雑誌「児童文学」には、宇野浩二や横光利一、草野心平らも作品を寄せている。ここから執筆依頼を受けた賢治は「北守將軍と三人兄弟の医者」と「グスコープドリの伝記」二作を寄せた。著者はこの出来ごとを「それまでの心象スケッチ的な短編童話や風刺的な寓話から長編少年小説へ移るきつかけをつくつた」と評価する。

私が本書で賢治の「独自性」よりは「同時代性」に共感を覚え、想像をかきたてられたことは、述べてきたとおりでであるが、最も衝撃的だったのは六章の「雨ニモマケズ」再論である。賢治研究には不案内なので、ここで指摘されている先行論文の評価や論点の整理は控えるが、「雨ニモマケズ」という詩の不思議を鮮やかに浮び上がらせることに成功している考察だ。

『校本宮沢賢治第十四巻』の「年譜」の解説(一九二六)には、羅須人協会時代にレーニンの『国家と革命』を読んだことが記さ

れているが、「これ(レーニンの思想)筆者注」はダメですね。日本に限つてこの思想による革命は起こらない」と賢治はいい、「仏教にかえる」といつてうちわ太鼓で歩いたというエピソードについて、著者は「間違ひなく事実であると思う」とする。「一九二八年暮れの病床の頃から、彼の詩に仏教的な言葉が目立つてくる」からである。

明治節制定運動の推進者であつた田中智学とその結社である国柱会に賢治が心酔していたということは、本書ではじめて知つた。昭和期ファシズムの先駆けともいふべきこの運動への傾斜は、レーニンを読みその思想と日本の風土とに異和を感じた人の帰結として自然のなりゆきかもしれない。いや、本書の考察によれば賢治は、あちらがダメだからこちらへという選択をしたのではないことがわかる。「北ニケンクワヤ ソシヨウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイヒ」の詩句は無抵抗主義としてうたわれたのではなく、「一人づつぶつかつて火のついたやうにはげまして行け」、「眼を大きくして見てあるけ」(「降る雨はふるし」)のよ

うな激しい行動や表現と表裏してあらわれているという。賢治研究の初心者として本書を読むと、賢治は左翼思想と右翼思想のはざまを生きて表現したことがわかる。先に二つの異なる眼について述べたが、左と右のはざまといういい方は間違ひで、あわせ持つといった方がいいのかもしれない。国柱会の主張する国民運動はやがて十五年戦争という「総力戦」「思想戦」の担い手となつて行くが、その歴史が国民生活を根こそぎ破壊し尽くすのを賢治は見ずに済んだ。早すぎた死もそう考えると、賢治という現象に透明な輝きを保障するための天意だったのかもしれない。

(翰林書房 一九九五・八・二五)

(本学助教)